

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 19 日現在

機関番号：32665

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580004

研究課題名(和文)分析哲学における存在論の復権に関する思想史的研究

研究課題名(英文)A Study of the Revival of Ontology in Analytic Philosophy

研究代表者

伊佐敷 隆弘 (ISASHIKI, Takahiro)

日本大学・経済学部・教授

研究者番号：50274767

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：「存在の謎」(なぜ無ではなく何かが存在するのか)をめぐる現代の論争状況を見ると、分析哲学において存在論が完全に復権したことが分かる。復権の原因は、(1)検証原理の持つ困難、(2)クワインの全体論、(3)ストローソンの記述的形而上学、(4)クリプキの固定指示論の4つである。しかし、科学主義者クワインの貢献は限定的であり、ストローソンが概念の構造を探究したのに対し、現代の存在論は実在の構造を探究し、「アプリアリかつ可謬的」という特徴を持つ。現代の存在論は実在論的であり、経験科学に深く関わりつつも、経験科学から自立している。

研究成果の概要(英文)：Looking into the controversy about the Riddle of Existence (Why is there something rather than nothing?), we can know that ontology has been restored in the contemporary analytic philosophy. The causes of its restoration are; the difficulty lurking in the principle of verification, Quine's holism, Strawson's descriptive metaphysics, and Kripke's theory of rigid designators. But adhering to scientism, Quine's contribution was limited. While Strawson examined the structure of concepts, the contemporary ontology examines the structure of reality. It provides a priori but fallible knowledge. It is realistic and independent of, though deeply concerned with, the empirical sciences.

研究分野：哲学

キーワード：分析哲学 存在論 形而上学 分析形而上学 メタ形而上学 存在の謎 検証原理

1. 研究開始当初の背景

分析哲学の歴史は、(1) 20世紀前半(論理実証主義や日常言語学派)、(2) 20世紀半ば(クワイン・ストロソン・クリプキたち)、(3) 20世紀末以降(分析形而上学の誕生と存在論の復権)」という3つの時期に分けることができる。

20世紀前半の分析哲学において形而上学(存在論)は厳しく批判された。例えば、論理実証主義者エアは検証原理(「検証可能な命題だけが有意味だ」)に基づき、「形而上学的命題は検証できないから、真でも偽でもない無意味な擬似命題だ」と批判し、カルナップは「形而上学者は音楽の才能のない音楽家だ」と罵った。また、日常言語学派ライルも「形而上学的哲学者の語ることは、よくて誤解を招き、悪くて無意味だ」と批判した。

ところが、20世紀末以降の分析哲学において存在論は「分析形而上学」として完全に復権し、「普遍と特殊」、「存在と同一性」、「個体と属性」、「様相と可能世界」、「決定論と自由」などの古代中世以来の伝統的な問題が熱心に論じられている。

「20世紀半ばのクワインの仕事が論理実証主義から形而上学批判の力を奪い、その後の分析形而上学や存在論を準備した」と評価する論者がある。確かにクワインの全体論が論理実証主義の検証原理から形而上学批判の力を奪ったことは否定できないが、クワイン自身は「哲学と自然科学の連続性」を主張し、形而上学へは行かなかった。それゆえ、存在論の復権には他の原因もあるはずである。それは何なのか。

また、20世紀前半における厳しい形而上学批判を踏まえれば、「形而上学的知識とはいかなる知識なのか」というメタ形而上学的問いは今も答えられるべき問いである。では、現代の分析形而上学はこの問いに対してどのように答えているのか。

分析哲学の歴史の中で、かつて厳しく批判された存在論が復権した原因は何なのか。このことを明らかにしたい。これが本研究の背景であり、動機である。

2. 研究の目的

まず、(1)分析哲学における存在論の現状を調査し、存在論が復権したことを確認する。

次に、(2)論理実証主義者による「検証原理」のたどった歴史、(3)日常言語学派の「記述的形而上学」から現在の「カテゴリー論」への流れ、(4)20世紀半ばの様相概念(必然性・可能性)をめぐる議論について調査する。

さらに、(5)「形而上学的知識とはいかなる知識なのか」に関する現代の分析形而上学者の見解を調査する。

以上の調査を踏まえ、分析哲学における存在論の復権の原因を明らかにする。

3. 研究の方法

約80点の関連文献を調査するとともに、存

在論それ自体について自分でも考察した。また、学会等において他の研究者からの批判を仰いだ。

4. 研究成果

(1)分析哲学における存在論の現状。

「存在の謎」(なぜ無ではなく何かが存在するのか)はかつて「無意味」とされた問いであった。しかし、1996年アイルランドのダブリンでアリストテレス協会とマインド協会が共同開催した研究大会においてこの問いはシンポジウムのテーマとして掲げられた。アメリカからヴァン・インワーゲンが参加して、確率説(「無数にある可能世界のうち、存在物を含まない空世界は1つしかないから、現実世界が空世界である確率は限りなくゼロに近い」)を唱え、イギリスからジョナサン・ロウが参加して必然説(「自然数は必然的存在者であるが、具体的個物なしに自然数は存在できないから、何らかの具体的個物が存在することは必然的である」)を唱えた。存在の謎をめぐるのは、その他にも多くの論文が書かれ、論証の構造そのものについて論じたパーフィットは「最善」、「最単純」、「豊穡」、「非恣意的」、「エレガント」、「なまの事実(基準はない)」などの基準がこの謎をめぐる論証で用いられていることを指摘している。このような活発な論争状況を見ると、現在の分析哲学において存在論が完全に復権していることが分かる。

(2)検証原理と全体論。

論理実証主義者は「検証原理」に基づいて形而上学を批判した。しかし、検証原理には、第一に、「検証原理そのものは検証可能なのか」という難点が含まれていた。第二に、経験的命題を許容し形而上学的命題を排除するよう過不足なく検証原理を定式化することは困難であった。第三に、命題の検証手続きには全体論の萌芽が元々含まれていた。というのは、間接的検証(命題Pと他の諸前提から導出される観察命題を検証するによって、命題Pを間接的に検証する)の場合、この「他の諸前提」の検証に更に他の前提が必要だからである。そして、最終的に、クワインが論文「経験主義の2つのドグマ」(1951年)において提唱した全体論(「諸命題は個々独立にではなく、一つの統合体として感覚的経験の裁きに直面する」)が検証原理から形而上学批判の力を奪った。なぜなら、存在論に属する命題も我々の知識のネットワークの中にしかるべき位置を持つなら、たとえ単独で検証できなくても意味を持ちうるからである。

ただし、ジョナサン・ロウはクワインを「科学主義」と呼んで批判する。というのは、クワインは「自然化された認識論」を提唱し、認識論を心理学に還元し、哲学を自然科学と数学(集合論)に還元することを目指したが、これは形而上学の自律性を主張する現代の

分析形而上学とは対立する考えだからである。したがって、存在論の復権に関するクワインの貢献は限定的である。

(3)記述的形而上学からカテゴリー論へ。

日常言語学派はそれ以前のイギリスヘーゲル学派（ブラッドリーやマクタガートたち）の観念論的で一元論的な哲学への反動として分析を重視したが、その結果「全体への考察」としての形而上学に拒絶反応を持つようになった。しかし、日常言語学派に属するストローソンが公刊した『個体：記述的形而上学』（1959年）という本が分析哲学者たちの形而上学に対する拒絶反応を和らげた。そのサブタイトルに「形而上学」とあるだけでなく、この本は「我々の概念構造の最も基礎的なカテゴリーを探究する」という体系性においてそれまでの言語分析と異なっていた。つまり、それはロウの4カテゴリー論（対象・モード・種・属性）をはじめとする現代のカテゴリー論の先駆をなすものであった。

ただし、ロウが「ストローソンは人間の概念構造の分析にとどまった」と批判するように、20世紀末以降の存在論は「实在全体の持つ根本構造」を探究の対象にしている。ロウによると、形而上学が明らかにすべきことは、人間の思考構造（カント）・概念構造（ストローソン）・言語構造（ダメット）ではなく、实在の構造である。このように、現在の存在論は实在論的である。

(4)様相概念と形而上学の自律性。

「必然的」（必ず成り立つ）、「アприオリ」（経験によらずに正当化できる）、「分析的」（意味によって真）の3つは概念としては区別されるが、真理の範囲としては一致すると（「アприオリで総合的な真理」の存在を主張したカントを例外として）ほとんどの哲学者が信じていた。

しかし、クリプキは論文「名指しと必然性」（1972年）において、固定指示詞（すべての可能世界で同一の対象を指示する語句）に関する彼の議論に基づいて、「必然的だがアポステリオリな真理」（例えば「フォスフォラスとヘスペラスは同一の天体（金星）である」という真理）や「偶然的だがアприオリな真理」（例えば「1メートルは時点 t_0 におけるメートル原器の長さだ」という真理）の存在を示した。これにより、「必然的・偶然的・可能的」という様相概念が、認識論的概念（アприオリ・アポステリオリ）や意味論的概念（分析的・総合的）から明確に区別された形而上学概念としての身分を得るに至った。こうして形而上学は認識論や意味論に吸収されない自律性を獲得した。

(5)分析形而上学者自身の形而上学観。

「形而上学的知識とはいかなる知識なのか」ということに関して現代の分析形而上学はどのように答えているのか。代表的分析形而

上学者であるジョナサン・ロウの形而上学観を検討した。

ロウによれば、形而上学は实在全体の根本構造に関わる。同じく实在全体を探究対象とする物理学との違いは「形而上学的知識はアприオリだ」という点である。また、形而上学は可能性を教え、経験は現実性を教えるが、存在可能なことのみが現実に存在しうるから、形而上学はあらゆる経験科学の前提をなす。ただし、この可能性は論理的可能性や概念的的可能性ではなく、形而上学的可能性（物の本性に基づく可能性）である。

「形而上学は科学に吸収されるべきだ」という科学主義の主張も、「实在それ自体についてアприオリな知識は得られず、思考・概念・言語についてなら得られる」というカント・ストローソン・ダメットの形而上学の主張も、実はそれ自体が实在の根本構造に関する主張である。ロウによると「人はみな、好むと好まざるとに関わらず、また、気づいていようとまいと、形而上学者」である。

形而上学的知識は概念を考察することによって得られるが、それはストローソンの記述的形而上学のように既存の概念を記述することではなく、实在に一層適合するような概念を見いだすことを目指すのである。それゆえ、形而上学は可謬的である。

「アприオリで可謬的」というのは一見矛盾しているようだが、「形而上学は経験科学から自立しつつも、経験科学と深く関わる」というロウの形而上学観がここに現れている。

さらに、研究の進展に伴い、分析形而上学の将来についての予想をおこなった。

(6)形而上学と思考や言語との関係。

現代の实在論的分析形而上学は实在と思考（概念・言語）の峻別を前提にしている。そこには思考や言語への楽観的な信頼がうかがわれる。しかし、形而上学的考察を進めていくと、思考と存在とが絡み合い、両者の峻別が困難な場面に至ることがある。つまり、形而上学には「思考や言語の限界における探究」という局面がある。分析形而上学もこのような局面にいずれ達することが予想される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

伊佐敷 隆弘, ロウの形而上学観, 日本大学経済学部『研究紀要』, 査読無, 第81巻, 2016年, 印刷中。

伊佐敷 隆弘, なぜ無ではなく何かが存在するのか 分析哲学における形而上学の盛衰, 日本大学経済学部『研究紀要』, 査読無, 第77巻, 2015年, pp.1~20。

〔学会発表〕(計 3件)

伊佐敷 隆弘, 井上忠の哲学を「ギリシア哲学解釈」という枠からはずす, 哲学会, 2015年11月1日, 東京大学文学部(東京都文京区)

伊佐敷 隆弘, 線イメージに依拠しない哲学的時間論の試み, 日本大学哲学会, 2015年10月24日, 日本大学文理学部(東京都世田谷区)

伊佐敷 隆弘, Is the Present a Durationless Instant? *Philosophy of Mental Time III: The Metaphysics of Time*, 2014年9月27日, 明海大学(千葉県浦安市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊佐敷 隆弘 (ISASHIKI, Takahiro)

日本大学・経済学部・教授

研究者番号: 50274767